

# 愛子さま平和願う作文

## 中等科を卒業

皇太子ご夫妻の長女愛子さま(16)は22日、東京都新宿区の学習院戸山キャンパスで開かれた学習院女子中等科の卒業式に出席した。登校時に「楽しい3年間だった」と中学生生活を振り返り卒業記念文集に寄せた作文では「『平和』は、人任せにするのではなく、一人一人の思いや責任ある行動で築きあげていくもの」と訴えた。

## 卒業式



学習院女子中等科の卒業式を前に、3年間の感想を述べられる愛子さまと皇太子ご夫妻(代表撮影)

### いつか、核兵器のない世の中に 広島訪問を述懐

作文は「世界の平和を願う」との題で、宮内庁が同日付で公開。昨年5月に広島市の平和記念公園を訪れた修学旅行で「私の意識が大きく変わった」と述懐し、目にした原爆ドームや

愛子さまが卒業記念文集に寄せた作文の全文は次の通り。  
(表記は原文のまま)

世界の平和を願って卒業をひかえた冬の朝、急ぎ足で学校の門をくぐり、ふと空を見上げた。雲一つない澄み渡った空がそこにあった。家族に見守られ、毎日学校で学べること、友達が待っていてくれること……なんて幸せなのだろう。なんて平和なのだろう。青い空を見て、そんなことを心の中でつぶやいた。このように私の意識が大きく変わったのは、中三の五月に修学旅行で広島を訪れたからである。

原爆ドームを目の前にした私は、突然足が動かなくなつた。まるで、七十一一年前の八月六日、その日の場に自分がかかっているように思えた。ドーム型の鉄骨と外壁の一部だけが今も残っている原爆ドーム。

千羽鶴、核兵器のない世界を求めて燃え続ける平和の灯を通して「平和とは何か」を考えたこと寧ろに記した。訪問の2週間後に米国のオバマ大統領が訪れ、折り鶴を寄贈したことに言及。世界中からさげられた折り鶴を見た時の心境を「皆の思いは一つである」とに改めて気付かされた」と振り返った。

毎日の生活を「当たり前だ」と思っている「と締めくくつた。愛子さまは22日朝、ご夫妻と登校。報道陣に「先生方とお友達に恵まれ、楽しい3年間を過ごすことができました」とはつらつとした表情で語った。夕方には皇居・御所へ天皇、皇后陛下に卒業を報告。4月からは女子高等科に進む予定。

## 作文の全文

写真で見たことはあったが、ここまで悲惨な状態であることに衝撃を受けた。平和記念資料館には、焼け焦げた姿で亡くなった子供が抱えていたお弁当箱、熱線や放射能による人体への被害、後遺症など様々な展示があった。これが実際に起きたことなのか、と私は目を疑った。平常心で見ることができなかった。そして、何よりも、原爆

が何十万人という人の命を奪ったことに、怒りと悲しみを覚えた。命が助かっても、家族を失い、支えてくれる人も失い、生きていく希望を失い、人々はどのような気持ちで毎日を送っていたのだろうか。私は想像もつかなかった。最初に七十一一年前の八月六日に自分がいるように思えたのは、被害にあった人々の苦

しみ、無念さが伝わってきたからに違いない。これは、本当に原爆が落ちた場所を実際に見なければ感じることのできない貴重な体験であった。その2週間後、アメリカのオバマ大統領も広島を訪れ、共に、平和を求め、核兵器のない世界を追求する勇気を持つ」と説いた。オバマ大統領は、自らの手で折った千羽鶴を、その思い

を込めて、平和記念資料館にそっと置いていかれたそう。私たちが皆で折った千羽鶴を手に持った。私たちが千羽鶴の他、この地を訪れた多くの人々が折った千羽鶴、世界中から届けられた千羽鶴、沢山の折り鶴を見たときに、皆の思いは一つであることに改めて気づかされた。

平和記念公園の中で、ずっと燃え続けている「平和の灯」。これには、核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やされ続けようという願いが込められている。この灯は、平和のシンボルとして様々な行事で採火されている。原爆死没者慰霊碑の前に立つたとき、平和の灯の向こうに原爆ドームが見えた。間近で見た悲惨な原爆ドームとは違って、皆

安心して暮らすことができ、当たり前だと思つてはいけない。なぜなら、戦時中の人々は、それが当たり前でできなかったのだから。日常の生活の一つひとつ、他の人からの親切一つひとつに感謝し、他の人思いやることから「平和」は始まるのではないだろうか。

そして、唯一の被爆国に生まれた私たち日本人は、自分の目で見て、感じたことを世界に広く発信していく必要があると思う。「平和」は、人任せにするのではなく、一人ひとりの思いや責任ある行動で築きあげていくものだから。

「平和」についてさらに考えを深めたいときには、また広島を訪れたい。きっと皆の手がかりが見つかるだろう。そして、いつか、そう遠くない将来に、核兵器のない世の中が実現し、広島市の平和の灯の灯が消されることが心から願っている。